

コロナ禍前後における女子大生の「推し活」

—支持対象者・居住地・居住形態に着目して—

笹田有紗香・大淵裕美

(神戸女子大学家政学部家政学科)

はじめに

近年、ファン活動が活性化し、「推し活」という名称で取り上げられる機会が増加している。2020年10月5日にNHKの「あさイチ」が初めて「推し活」を特集し、あさイチ史上最高の45,060件ものアンケートの回答が集まった¹。同番組では大反響を受け、2021年1月6日に第2弾が放送され、さらに2021年5月からは、「#教えて推しライフ」としてコーナー化された。NHKでは、「推しとともに歩む人生そのもの」という意味を込めて「推しライフ」という言葉を提唱している²が、ファン活動そのものや、推しのために生きるライフスタイルそのものに関心が高まっている社会状況と言えるだろう。

ファン活動に関する研究は、ジャニーズ (Oksana2019) やK-POP (金2018) などの各ジャンルを対象とした研究や、日韓でのアイドル表象の差異を明らかにした研究 (田島2020)、ファンをどのように定義づけるかといった理論研究 (池田2014) などが蓄積されている。笹田 (2020) は、こうしたファン研究から取りこぼされていた居住地や居住形態に着目し、ファン活動への満足度に与える影響について検討した。その結果、都市部や都市部近辺に住むファンの満足度が高く、都市部から離れた地方に居住地がある人ほど満足度が低い傾向があることが明らかとなった。しかしながら、これらの研究は新型コロナウイルスの影響を受ける前のファン活動を対象としており、新しい生活様式を踏まえたファン研究を行う必要がある。

吉光 (2021) は、コロナ禍の自粛期間中に女性ファンがどのような「推し活」をしていたのかを解明した貴重な研究である。吉光によると、自粛期間中の女性ファンたちは、会えない推しを支援するために各種のサービスや公式商品を購入したり、自分の発言や他者の価値観に配慮しつつソーシャルメディアを利用した「推しのための広報活動」を熱心に行っていたと指摘する。ただし、吉光の研究では、自粛期間中に支持対象者 (推し) が変化しなかった事例を中心に扱われている。そのため、2年近く長期化したコロナ禍において、支持対象者も含めたファン活動がいかに変化したのかを明らかにする課題が残されている。

そこで本研究では、女子大学生に焦点をあて、コロナ禍以前と以降のファン活動の変化を探索的に明らかにすることを旨とする。コロナ禍以前と以降でファン活動や居住地・居住形態に対する満足度はどのように変化したのだろうか。支持対象者の変化の有無や、ライブ配信などの選択肢の増加が居住地や居住形態への満足度に与える影響に着目して検討したい。

1 研究方法

本研究では支持対象者がいて、対面での音楽イベントに通った経験のある5人の女子大学生を対象にインタビュー調査を実施した。調査期間は2021年10月～11月、調査時間は約1時間でZoomを使用してオンラインで実施した。調査は対象者の同意を得て記録し、逐語録を作成した。質問内容は、年齢、居住地、居住形態といった対象者の属性や、コロナ禍前後でのファン活動や満足度の変化などである。

¹ 「推し歴25年の私が4万5060件の“推しアンケート”ととことん向き合った話」[NHK_PR]
<https://www6.nhk.or.jp/nhkpr/post/original.html?i=29348>, 最終アクセス2022.02.24

² 「推し歴25年の私が4万5060件の“推しアンケート”ととことん向き合った話」[NHK_PR]
<https://www6.nhk.or.jp/nhkpr/post/original.html?i=29348>, 最終アクセス2022.02.24

2 結果

2-1. 対象者の概要

調査対象者の特徴は次のとおりである。平均年齢は 21.2 歳、居住地は兵庫県が 4 名、神奈川県が 1 名、居住形態は実家が 3 名、1 人暮らしが 2 名だった。また、コロナ前後で支持対象者に変化がなかった人は 2 名、支持対象者に変化があった人が 3 名で、コロナ前にジャニーズ関連のグループを応援していた人は 3 名、邦ロックバンドが 1 名、2.5 次元ミュージカルが 1 名だった。一方コロナ後に支持対象者が変化した中では、VTuber が 1 名、J-POP、K-POP、C-POP が 1 名、2 次元と JO1 が 1 名だった。さらに、親子で同じグループを応援した経験のある人は 3 名だった（表参照）。以下では、コロナ前後における支持対象者の変化の有無に着目して、ファン活動と居住地・居住形態に対する満足度の変化について検討していきたい。

表 調査対象者一覧表

対象者	年齢	居住地	居住形態	支持対象者		ファン活動への投資(月額)		居住地の満足度		居住形態の満足度		備考
				コロナ前	コロナ後	コロナ前(最大月額)	コロナ後	コロナ前	コロナ後	コロナ前	コロナ後	
Aさん	22歳	尼崎市	1人暮らし	邦ロックバンド (SEKAI NO OWARI、Saucy Dog、back number、My Hair is Bad)	変化なし	4~5万円	ほぼない	80%	70%	70%	85%	家族でSEKAI NO OWARIファン。自粛期間中にオンラインゲームにはまる。
Bさん	20歳	加古川市	実家	ジャニーズWEST、関西ジャニーズJr.	変化なし	親に買ってもらうことが多いため不明		70%	100%	80%	85%	親子でジャニーズファン
Cさん	21歳	西宮市	実家	ジャニーズWEST	VTuber(戌神ころね)、ジャニーズWEST	1万~1万5千円	1万円弱	70%	100%	100%	70%	家族にファン活動をしている人がいない(非協力的ではない)
Dさん	21歳	神戸市	1人暮らし	2.5次元	J-POP、K-POP、C-POP(韓国ドル)、2.5次元	2万円	8千円~1万円	90%	90%	100%	100%	2.5次元はコロナ禍で少し冷める
Eさん	22歳	横浜市	実家	ジャニーズJr.	ジャニーズJr. 2次元、JO1	8万円	コロナ前とほぼ同程度	100%	100%	95%	90%	親子でジャニーズファン

2-2. コロナ前後でのファン活動と満足度の変化

2-2-1. 支持対象者が変化しなかった事例

(1)「戻ってほしいし、自分にもそっちのほうが合ってる気がする」

Aさんは、SEKAI NO OWARI、Saucy Dog、back number、My Hair is Badなどの「邦ロックバンド」のファンである。特にSEKAI NO OWARIは中学生の頃から応援しており、家族と一緒にライブに行くことがあった。2019年9月までは大阪府内の比較的都市部にある実家で暮らしており、2019年10月から兵庫県内で1人暮らしをしている。大学生になってから、フェスでぐくまれに地方に遠征することはあったが、基本的には大阪を中心とした関西圏のライブに参加しているため、居住地については「夜行バスとかは大阪市内のほうまで出ないと行けなかったから少しデメリットに感じるけど、1時間ちょっとで行けたしめっちゃくちゃ不便とも感じなかった」³。実家暮らしの頃はアルバイトで稼いだお金を全て好きなことに使えることや、家族と一緒に応援しているバンドのライブがあると会場まで車で行くため交通費が自己負担ではなかったなどの理由から居住地・居住形態ともに高い満足度を得ていた。ただ、実家暮らしの頃は、テレビがリビングに1台しかなかったため、ライブDVDを好きな時間に視聴できないことや音楽を聴く際もイヤホンをして音が漏れないようにするなど、家族に気を遣っていた。ファン活動への投資としては、チケット代や交通費が大半で、ライブ会場で1,500円程度のタオルを購入する程度で、グッズにそれほどお金をかけていなかった。

1人暮らしでコロナ禍の生活を迎えたAさんだが、音楽イベントが全て中止・延期となったコロナ禍以降も変わらずロックバンドを応援し続けていた。

バンドは「会いに行けるアイドル」みたいなものをテーマにやってるような、元々ファンと近い距離だった

³ 2021年10月7日聞き取り。

わけではないから。バンドは歌を聴きに行くことがメインやから、ライブハウスとかやと物理的に距離は近いけど握手会とかそういうのはなかったから、生でライブにいけないのは辛いけど、アイドルと違って直接的に触れ合うみたいなことはないから、そういう人達（のファン）に比べたら打撃は少ないかな。生で会えるのは辛いけど、別に音楽はYouTubeとかサブスクでも聴けるから。

Aさんはバンドの「音楽」を中心に楽しんでいたため、比較的打撃が少なく、自粛期間中も応援し続けることができたと言っている。音楽イベントが中止になった分、過去のライブ映像がYouTubeで無料公開されたり、インスタライブで生配信が実施されその配信のアーカイブが残されたり、誰でも視聴可能なコンテンツが多数公開されるようになった。

ライブが中止になったからその分YouTubeでライブ映像みたりMVみたりとか、実際に生で会えない穴を埋めるじゃないけどそういうので見たり、逆にアーティスト側も誰でも見られるライブ配信をやってくれたりしたからそれを見たりしていたかな。主に、YouTubeでMVを見漁ったりしていたかも。

周囲を気にせず好きな時間に楽しむことができる1人暮らしの環境に対して高い満足度を示していた。また、アルバイト先が休業で収入がなくなった時期とも重なり、バンドにお金を使うことがほぼなくなったという。

ところが、2021年に久しぶりに何本かライブに参戦したAさんは、コロナ前と全く違う様式に非常に驚き困惑する。

（今までと）全然違う。今まではライブハウスに箱詰めでぎゅうぎゅうでみんな好き勝手声出したりしてたけどできないし、違う人のライブに来たんちゃうかって思うぐらいのレベルで変わった。収容人数もやし、今までライブハウスにパイプ椅子とか絶対なくてスタンディングでやったけど、今は人と人を作るために椅子がおかれててそこから聴く感じやし。今までってモッシュがあったんよ、みんなで真ん中に向かって走って騒いだり、そういうのも今は密やからなしやし・・・。

収容人数の制限や人と人との間を一定距離に保つためのパイプ椅子の設置、ライブ中の声援の禁止など感染防止対策が徹底した形式だったが、コロナ前のライブを知るAさんは非常に複雑な思いを吐露する。

ロックバンドのライブとかはみんな感情を体で表すみたいな感じやから、バンドのジャンルによってはみんな聴き入るバンドは逆に言うとコロナ前でも後でも形態はほぼ変わってないかもしれないけど、フェスとかライブハウスでやるようなバンドは、絶対になんか違う感があるって、みんなで一体になって聴くのが楽しいし、それありきの音楽みたいな感じやから静かにみんなで大人しく聴いてるのに対して違和感を感じたから、戻ってほしいし、自分にもそっちのほう合ってる気がする。オンラインライブとかもううれしいけど、例えば大阪でライブやらない代わりにオンラインライブしますとかやと、オンラインライブなしでいいから大阪でやってほしい。足を運んで生で聴きに行きたい。オンラインライブやと家で楽に見れるけど、わざわざ足を運んで聴きに行きたいかな。オンラインでしてくれたら嬉しいから聴くけど、あの小さいライブハウスでぐちゃぐちゃになりながら音楽を聴くのがひとつのあり方みたいでそっちのほうがいいなと思う。

Aさんは、コロナ禍以前の「小さいライブハウスでぐちゃぐちゃになりながら音楽を聴く」というライブ様式こそ、邦ロックバンドを生で聴く楽しみととらえている。そのため、コロナ禍以降の無観客の配信ライブより、感染防止対策を徹底した有観客でのライブ様式に開催を望むものの圧倒的な違和感を覚えている。「新しい形態でもしかたないからライブはしてほしい」と妥協して納得しているものの、コロナ禍以前のライブ様式に戻っ

てほしいと強く望んでいた。

(2) 「コロナ禍のほうが自分的にはよかったこともあるかな」

Bさんは、2014年頃から親子でジャニーズを応援している。BさんはジャニーズWESTと関西ジャニーズJrの「Aえ! group」を応援し、Bさんの母はジャニーズWESTを応援している。コロナ禍以前は、地方で開催される音楽イベントへ足を運ぶことはなく、居住地周辺の大阪や神戸を中心に参加していた。ジャニーズWESTも関西ジャニーズJrも、ライブツアーが開催されると必ず関西で凱旋公演が行われるため、Bさんの居住地から会場への移動距離や交通の便が良い点において高い満足度を示していた。また、ライブDVD、CDといった関連グッズ代やチケット代を母親が出してくれるなど、ファン活動に対して非常に協力的である。さらにBさんは一人っ子で実家暮らしであり、周りに同じ趣味の人がいないため、母親と趣味の話を共有できることは有難いことだと述べている。経済面や精神面でも二世帯で応援していることで満足度はかなり高い。

コロナ禍以降も支持対象者は変わらず応援しており、対面のコンサートもオンラインライブも経験したBさんは、現在のファン活動について次のように語った。

コロナ禍になってからコンサートと舞台に2回行ったんですけど、やっぱり声を出せないのは結構きつかったもので、そう思ったらコロナ禍前の方がよかったかなと思います。オンラインライブがあるっていうのは結構ありがたいです。おうちでゆっくり見れるっていうのと移動時間がないっていうのはやっぱりいいです。⁴

感染防止対策が徹底されたライブ様式は、コロナ前のライブを知るBさんにとって不満を感じる部分もあった。その一方で、配信ライブはチケット自体が約4,000円と従来のチケットより2,000円～3,000円安価で、チケットを1枚購入すると複数人で視聴可能なこともあり2公演視聴するなど、金銭的な点でもメリットがあった。さらに、Bさんは体力面でも新たな気づきをもたらす部分もあった。

私はファン活動もですけど、それ以前にコロナ禍のほうが自分的にはよかったこともあるかなって思います。元々体力があんまりなくて、インドアなので大阪まで行くってなったら結構体力を消耗するんですよ。ライブではずっと立って声出してってしてたら結構疲れるので、自分の好きな時に声出したりできる家やったら会えないのはあれですけどそこだけでも満足感はあるので、コロナ禍でも楽しいかなという感じです。

このように、自分の体調やペースに合わせて快適な環境で応援できる新たな方法に利点を見出していた。

Bさんは居住地・居住形態に関してコロナ禍前後どちらでも全体的に高い満足度であった。ファン活動においても、支持対象者と会えない不満はあるが、コロナ禍以前のファン活動で感じていた満足度に匹敵するほどの満足度をコロナ禍以降の新たなファン活動様式で感じていた。

2-2-2. 支持対象者が変化した事例

(1) 「無料で供給の多いものでないと」

Cさんは、高校生のころからジャニーズWESTを応援している。コロナ禍以前では、居住地周辺、特に大阪を中心にライブに参加していた。支持対象者は関東を拠点に活動しているため、関東に対する憧れはあるものの、関西での会場にしか足を運ばないため、会場へのアクセスが良い居住地に対する満足度は高い。実家暮らしのため、お金が不足しているときはすぐに親から借りることができるところをメリットとして挙げており、デメリットには、家族に同じようにファン活動をしている人がいないためライブDVDを視聴するときに気を遣うこ

⁴ 2021年10月18日聞き取り。

とが挙げられた。多少の不満はあるものの、コロナ禍以前のファン活動において居住地・居住形態ともにとっても高い満足度であった。

ところが、Cさんのファン活動は、コロナをきっかけに大きく変化した。

コンサート自体がなくなってしまったから、そこはすごく大きくて、ほとんどコンサートに向けてアルバムを買ったりだとかグッズを買ったりしていたから、それが一切なくなった。逆にライブ DVD に関しての出費は増えたかな。私はライブ配信（オンラインライブ）を見なくて、どうせ見るんやったらライブ DVD で画質のいいのを見たいなっていうのがあって、だから過去の公演をブルーレイとかで見るっていうほうにお金をかけるようになったかな。でもそこまで買ってないから（コロナ）前のほうが出費は多かったかも⁵。

Cさんは、コロナ禍以前はライブに向けて CD やグッズを購入していたが、コロナを契機にライブがなくなり、一切購入しなくなった。その代わりに、画質が良く何度も繰り返し視聴できる過去の公演のライブ DVD にお金をかけるようになった。その理由のひとつに、アルバイト先が休業になり収入がゼロになったためファン活動に投資する余裕がなくなったことが挙げられる。「推しに使う分は DVD、CD1 枚買ったぐらいかな。1 万円も使っていないと思う。欲しいのあるけどちょっとやめとこうみたいな」と、常に節約して生活をしていた。ライブやコンサートを重視しなくなったため、居住地に対する満足度は 100% と上昇した反面、実質的にはファン活動を制限せざるを得なかった。そんな中、新たな支持対象者である VTuber と出会った。

現場に行くような感じではないんですけど、一時期バイトができなくなったからお金をかけずにずっと遊ぶとなると YouTube を見るしかなくなって、それで VTuber にハマって。基本 VTuber って動画が主やから無料でずっと見れるんですよ。ホロライブっていう事務所に所属している戌神ころねちゃんって子にハマってます。

ただし、動画配信を主に活動している VTuber の配信を視聴するときは家族の目があるため、家族がいる場所では視聴しないようにしている。自由にみることのできない環境に対する不満はコロナ禍以前よりも大きく、居住形態に関する満足度はコロナ禍以前に比べて低かった。

Cさんはコロナ禍以降のファン活動において、「どれだけコスパが いいか」を重視している。

とにかくお金がないから、無料で供給が多いものじゃないと。そう考えるとジャニーズは難しいかな……。やっとな YouTube ができるようになってやっとなって感じ。

コロナ禍以降のファン活動において、Cさんは満足度を上げるために「なるべくお金をかけない方向にシフト」している。そのため、ジャニーズ WEST が出演する番組を必ず録画したり、ネットで公開されている VTuber の動画を何度も視聴するなど、工夫してファン活動を行っていた。自分の家計状況に合わせてファン活動を変化させた事例と言えるだろう。

(2) 「役込で作品自体で無料で見れるものがあれば嬉しい」

Dさんは高校2年生のころから 2.5 次元の舞台作品に興味を持ち始め、特別応援している俳優はつくらずに、気になった作品や好きな作品を目当てに観劇していた。コロナ禍以前は、東京・大阪・京都などを中心に劇場がある土地へ足を運んでいた。舞台自体は1回の観劇で満足できるためチケット代の支出は少なく、その一方ファ

⁵ 2021 年 10 月 20 日聞き取り。

ン活動費のほとんどをライブ DVD やグッズに充てていた。特にグッズはペンライトや缶バッジ、気に入ったビジュアルのプロマイドなどを集めている。Dさんは1人暮らしをしており、実家と比較して劇場へのアクセスが良く交通費の出費が少ないことや、親の監視下でない点で居住地・居住形態に関して非常に高い満足度を示している。1人暮らし特有の悩みである生活費に関しては、デメリットと感じるほど負担に感じていなかった。

コロナ禍以降、2.5次元の舞台も一時期全ての有観客公演が中止・延期となった。有料のオンライン配信が行われるようになってから視聴することがあったものの、現場に行けないことで2.5次元への意欲が少しずつ薄れていった。「自分はやっぱり客降りがあったから行ってた部分もあったから客降りしてくれるほうが嬉しいかな。だからコロナ前のほうが自分が行く意味とかあったからそっちの方がいい」⁶と語り、コロナ禍以降の舞台を直接観劇する意欲が低下していった。ただし、「次あったら応募しようかなって思ってます」と応援する姿勢に変化はなかった。

2.5次元のファン活動に対する意欲が迷走していたころ、Dさんはジャニーズ、K-POP、C-POPといった新たな支持対象者との出会いがあった。

自由な時間が増えて暇になったから、YouTubeとか動画を見る頻度が増えてたまたま見かけたのが、ジャニーズのYouTubeだったり、韓国だったり。C-POPはその当時サバイバル番組にハマってて、中国でもやるってのを知って見始めたのがきっかけです。

2.5次元は基本的に有料で配信されており、無料で誰でも気軽に視聴できるものがほとんどなかった。「俳優さん個人やとインスタライブとかはしてくれるけど、あんまり俳優さんよりかは役込で作品自体で無料で見れるものがあればうれしい」と、2.5次元の無料配信コンテンツの少なさを指摘していた。それに比べてK-POPやJ-POPは無料で配信されているものが多く、手軽に視聴できることに対して高い評価を示していた。

一方、コロナ禍以降のファン活動への投資については、「逆に増えた」とも語る。

コロナ禍になってから2.5(次元の現場)に行かなくなって、その分チケット代や交通費が浮いて、お金が余ってきた分をジャニーズとか、K-POPのCDとかに使ったりしてて、逆に増えたかな。(中略)現地に行くことがなくなったからペンライトとかはいらなくなったけど、その分プロマイドとか違うグッズにお金をかけるようになったかな。コロナ禍での需要がなくなったのかはわからないけど缶バッジとかはいらなくなった。その代わりに、アクスタ(アクリルスタンド)とかは買うようになって違う界限の推しを並べたりして。

Dさんの場合は、コロナを契機に無料コンテンツの豊富な支持対象者に移行していった事例と言えよう。コロナ禍以降も居住地・居住形態に関しては多少の変化はあるものの、高い満足度であった。実家よりも都市部にアクセスしやすい場所に居住していることに加えて、在宅時間が多くなり親の目を気にせずにファン活動を行える点で、1人暮らしの良さを再確認していた。

(3)「推しの目に入るものにお金をかけます」(Eさん)

Eさんは高校2年生からジャニーズ Jr. を応援している。コロナ禍以前は、居住地の関東を中心に支持対象者が出演する音楽イベントにほぼ参加するほど熱狂的なファンで、収入の約8割をファン活動に充てている。

基本は推しの目に入るものにお金をかけます。服とか自分の顔にかけるお金もそうだし、推しの目に入るものと他のファンの目に入るものだけは良いものを使いたいって感じはあったから、交通費とかは何も考え

⁶ 2021年10月12日聞き取り。

てないです。チケット代もそんなに考えてなくて。自分を上に見せるって言った方がいい方が悪いけど、周りから見て自分の価値が上がるものだけにお金をかけるって感じかもしれないです。⁷

Eさんはファン活動において“推しから見える自分、同じ会場にいるファンから見える自分”が常に納得いく状態であることを大切にしており、交通費やチケット代は深く考えず必要経費として捉えていた。居住地・居住形態に関しては、神奈川県でも都内に近いところに居住地があり、最寄り駅や学校からライブ会場へのアクセスが良いところや、通学用に定期券を所持しており交通費が自己負担でないこと、実家暮らしのため家のことを気にせず好きなことを好きなだけできる環境という点で非常に高い満足度を示した。

コロナ禍以降もジャニーズ Jr.を引き続き応援しており、ファン活動においては、支持対象者が出演する配信ライブは全公演視聴したり、グッズがオンラインで購入できるようになったことでコロナ禍以前のライブ会場で買うより購入額が増加したなど勢いは衰えていなかった。また、収入に多少の変化はあったものの金の使い方に大きな変化はなかった。例えば、コロナ禍前はライブ終わりに友人と食事に行くことで、チケット代やグッズ代といったライブに関する費用以外の出費が多かったが、飲食店の時短営業により公演終わりの食事がなくなり、チケット代だけで済むようになった。また、終電が繰り上がっても影響のない距離間の居住地であったり、母親も別のジャニーズグループでファン活動をしているため協力的で、配信ライブのチケット代は全て母親が負担してくれたり居住地と居住形態に対する不満はほとんどなく、コロナ禍以前とほぼ変わらず高い満足度であった。ただし、居住形態に関しては、実家暮らしのため自分がライブに参加することで家族の誰かがコロナに感染した際に自分のせいになってしまう、自分が感染源になってしまうリスクへの怖さがあると述べ、その点では1人暮らしは心が楽だろうなど、コロナ禍特有であろう1人暮らしに対する羨ましさを感じていた。

さらに、ファン活動の満足度や幸福度をあげるために、プロジェクターやファイヤースティックを購入したり、「現場に車で行けるようにしたかった」ため自動車免許を取得したりしていた。

Eさんはコロナ禍以前と以降のファン活動を比較して、次のように語った。

コロナ禍前かな。やっぱり実物見て、ファンサをもらって承認欲求をあげてこそ、満たすこそその現場って感じだったから、多分配信だけだと化粧とかもしないしすっぴんで対応してしまうけど、直接現場に行くってなると自分磨きとかするから自分のプラスになる、っていう点では直接会って自分から動くっていうほうが大事だったかな。(ファン活動で大切にしていることは)自分と高橋優斗⁸かな。コロナ禍前の現場行ってた頃は、その現場にいる他のファンから見て、自分と高橋優斗はどう見えるのかっていうのをすごい意識してて、結局なんだろう自分が目に入れたいじゃなくて、自分が(高橋優斗に)目に入れられたいなのかな。そう思うとこれは今(コロナ禍以降)も変わってないかも。まあ現場が戻ってきたからかもだけど。

Eさんは支持対象者に会えないことへの不満と同じくらいに、自宅でファン活動をしている時の不完全な自分の状態に不満を感じていた。

Eさんはコロナ禍以降、ジャニーズ Jr.の他にグローバルボーイズグループであるJ01や2次元、スマホゲームに興味を持ち始めるなど、複数のジャンルで支持対象者が増加した。Eさんが新たに応援をし始めた支持対象者には、「定期的な供給ですかね。家にいても推しを見れる、SNSを活用しているところ」という共通点がある。コロナ禍以前はジャニーズ Jr.だけで精一杯だったがコロナ禍以降、長期間の在宅期間で時間に余裕ができたことでYouTubeなどの動画投稿サイトを長時間見るようになり、元々興味があったジャンルを幅広く検索したことがきっかけで応援し始めた。Eさんはジャニーズの弱点を「供給があると飽きないじゃないですか、だから結

⁷ 2021年11月6日聞き取り。

⁸ Eさんの支持対象者。

局(コロナ禍のファン活動で大事なものは)供給ですよ。ジャニーズの課題って供給だと思いますよ」と指摘しており、SNS など大衆の目に留まるような無料のコンテンツを強く望んでいた。

Eさんは都心近くに居住地があり、実家暮らしで家族の理解があるという点で居住地・居住形態に関して非常に高い満足度であり、それはコロナ禍前後でほぼ変わることはなかった。Eさんの場合は、ファン活動を通して支持対象者に“会えないから辛い”ではなく、“会えないことで自分が廃れてしまう”ことに危機感を覚えている事例と言えるだろう。

3 考察

本論文では、女子大生のコロナ禍前後でのファン活動についてインタビュー調査をもとに検討してきた。以下では支持対象者の変化や、居住地、居住形態に焦点をあてて考察していきたい。

まず、多くの対象者が支持対象者の変化を経験した。在宅期間の長期化で自由な時間が増加し、YouTube等の無料動画投稿サイトやSNSをネットサーフィンしていたことをきっかけに興味を持ち始め、応援するようになっている。また、コロナ禍以降の支持対象者には“定期的な供給”と“無料で視聴できるコンテンツの多さ”といった共通点があった。このことから、コロナ禍以降のファン活動において、自宅で手軽に楽しめるコンテンツが多い支持対象者は非常に需要が高いことがわかる。

次に居住地であるが、笹田(2020)では、居住地に対する満足度が低い結果が得られたが、本論文では全般的に非常に満足度が高い傾向がみられた。コロナ禍以前では、全国各地でライブが開催されていたため、居住地の差はファン活動の内容と満足度に大きく作用していた。しかし、イベントやライブがインターネット環境さえあればどこでも視聴可能な配信型(オンラインイベント)へ切り替わったことで、居住地によるファン活動の格差は一定程度解消されたと考えられる。

最後に、居住形態については本調査では全般的に高い満足度であった。まず1人暮らしが高い満足度を示した理由として共通していたのは、親の監視下でないことであった。好きな時間にライブDVDや配信ライブなどを家族に気を遣わずに視聴できる環境に高い満足度を示していた。実家暮らしの中でもBさんとEさんは、母親もファン活動をしていることから家族がファン活動に理解があり、自宅でファン活動することに不満も感じていなかった。一方でCさんの家庭は非協力的ではないが、家族で同じようにファン活動をしている人がいないため、家族に気を遣いながらファン活動をしていた。また、コロナ禍以前は実暮らしであったAさんとDさんに当時のファン活動について聞くと、Cさんと同じように家族に気を遣って自由にファン活動ができない点や親の監視下にあることなど、同居する家族による制限に不満を感じていた。AさんとDさんがコロナ禍以降も実家暮らしであった場合、居住形態がファン活動の満足度に影響を及ぼしていたと考えられる。これらから、音楽イベントが配信型に切り替わり、自宅で楽しめるコンテンツが主流となったコロナ禍以降のファン活動において居住形態や家族の理解は以前に増して重要であることが推察される。

おわりに

コロナ禍以前のファン活動は、さながら「現場至上主義」であった。コンサート会場やライブ会場、劇場に赴き、ライブを生で見る回数だけではなく、現地でしか手に入らないグッズを入手したり、握手会、ハイタッチ会などのファンサービスを楽しむことができるかどうかで、ファンの間に格差や優劣があった。そのため、現地へのアクセスの容易さに影響する居住地や居住形態は大きな要因群であったと思われる。しかしながら、コロナ以降は、ライブ配信やグッズへのアクセスが格段に容易になり、オンラインでのファンサービスも導入されるようになった。さらに、無料コンテンツの定期的な供給が新たな常識となりつつある。そのため、従来の現場という指標以外に、様々なオンラインサービスを快適に視聴できる環境かどうかはむしろ重視されるようになってきたと考えられる。ただし、本研究はあくまで探索的なものであり、本研究から得られた知見がどの程度適用可能かは、今後多様な層を対象に実証研究を重ねる必要があるだろう。

【参考文献】

- 池田太臣、2014、「アイデンティティとファン活動：ファンとは誰か?」『甲南女子大学研究紀要・人間科学編』50：73-81.
- 金成玫、2018、『K-POP—新感覚のメディア』岩波新書.
- Oksana, Kakin、2018、「日本社会における「未熟さ」の商品化—ジャニーズタレントのファン行動を読み解く」『生活社会科学研究』25：51-63.
- 笹田有紗香、2020、「ファン活動において居住地が与える影響とは」2020年度神戸女子大学家政学部家政学科社会調査法レポート.
- 田島悠来、2020、「「アイドル」イメージの差異の表象—日韓合同オーディション番組『PRODUCE48』を事例に—」『帝京社会学』33：89-108.
- 吉光正絵、2021、「ライブ・エンターテインメントとファン活動—COVID-19自粛期間の「推し活」」『東アジア評論』13：51-62.

付記 インタビューにご協力くださった方々に記して感謝いたします。本論文は、2021年度神戸女子大学家政学部家政学科卒業論文「コロナ禍における女子大生の「推し活」—支持対象者・居住地・居住形態に着目して—」（笹田有紗香）を大幅に加筆修正したものである。